

「保育表現技術 (音楽1)」

—読譜2—

安藤 恭子*・藤田 桂子・森 久見子

“Early Childhood Education Expression Skills (Music 1)” —on Music Reading II—

Kyoko ANDO, Keiko FUJITA and Kumiko MORI

1、緒言

本学短期大学部保育学科では、平成17年度の学科開設以来、楽譜に対する意識を高めて読譜力を育成していくことを「基礎技能 (音楽1)」の到達目標の1つとして掲げ、これまで一貫して取り組んでいる。平成23年度より授業科目名が「保育表現技術 (音楽1)」に変更となったが、授業の目的や概要、内容等は「基礎技能 (音楽1)」に準じており、学生全員に読譜力を身につけさせることを目指した取り組みも引き続き行った。

「名古屋女子大学紀要第57号 (人文・社会編)」(以下、「第57号」) で述べたように、読譜に関する取り組みは、より良い指導を行うことができるように毎回指導内容を見直しているが、平成22年度には指導内容を大きく変改させている。今年度の読譜指導は昨年度の指導内容を参考として行ったが、昨年度の取り組みの中で課題として挙げられた点について改善を試み、さらに効果的な指導方法を模索しながらの取り組みである。従って、平成22年度の読譜指導を「読譜1」、今年度の読譜指導を「読譜2」として位置付けるものとする。

本研究では、「読譜2」における取り組みとその結果を考察し、来年度以降の「保育表現技術 (音楽1)」で行う読譜指導に役立てると共に、指導内容を検討する材料としたい。また、後期開講の「保育表現技術 (音楽2)」および平成23年度新設科目である「保育表現技術 (音楽3)」の指導内容にも反映させ¹⁾、学生の読譜に対する意欲を持続させることができればよいと考えている。

2、アンケート調査

(1) アンケート調査

「第57号」でも述べたとおり、本学科では毎年度、新入生を対象とした音楽関連のアンケート調査を実施している。これは、学生一人ひとりの音楽経験や音楽環境を把握することによって、その後の学生指導に役立てることを目的として行っているものである。音楽関連のアンケー

* 名古屋女子大学学生支援センター教学支援部門保育学科契約職員

トは例年、「基礎技能 (音楽1)」の授業オリエンテーションの中で行っていたが、平成22年度よりアンケートを2部構成とし、第1回目のアンケートを入学直後の新入生オリエンテーションの中で、第2回目のアンケートを授業オリエンテーションの中で実施するようになった。これは、アンケートの回答結果を指導内容に反映させるためにアンケートの実施方法と内容の見直しを行った結果である²⁾。アンケートの内容は、

- ① ピアノ学習経験について
- ② 歌唱についてとピアノ以外の音楽活動や家庭にある楽器等の音楽環境について
- ③ 読譜について
- ④ 読譜力調査

で構成している。平成22年度は、第1回目に「基礎技能 (音楽1)」の指導内容に直接関係すると考えられる①と③を調査した。続いて実施した第2回目は、「基礎技能 (音楽2)」に関連した②を調査した後に④を行った。

今年度のアンケートも平成22年度と同様に2部構成とし、第1回目を新入生オリエンテーションの中で、第2回目を授業オリエンテーションの中で実施している。しかしアンケートの内容は、第1回目で④を行った後に③を調査し、第2回目で①と②を調査した。アンケートの内容の入れ替えを行ったのは、最初に④を行うことによって自身の読譜力についてある程度認識できた後の方が、アンケートに回答しやすいのではないかと考えたためである。また、③の設問を増やし、読譜力習得に対する意欲等についても調査することにしたため、第1回目のアンケートの内容の全てが読譜に関係するものとなっている。

平成23年度実施のアンケート調査について以下に示す。ただし、読譜に関係する部分のみの掲載とする。

調査時期：第1回 平成23年4月6日 新入生オリエンテーションの中で実施

第2回 平成23年4月12日 授業オリエンテーションの中で実施

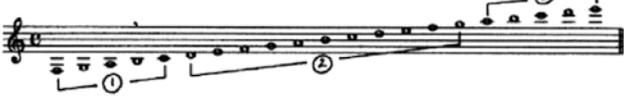
調査方法：質問紙法アンケート

調査対象：平成23年度本学短期大学部保育学科1年生132名中131名 (1名欠席)

表1 平成23年度実施アンケート

○印をつけてください。

* ト音記号 (高音部記号)



①の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

②の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

③の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

* ヘ音記号 (低音部記号)



④の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

⑤の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

⑥の部分 () 見てすぐ読める () 考えれば読める () 読めない

* 読譜力（音符を読む力）について教えてください。

（ ）すでに充分、音符を読むことができる。

（ ）ある程度は音符を読むことができる。

（ ）ほとんど音符を読むことができない。

* 今後、読譜力を身につけていきたいと思っっていますか。

（ ）身につけるように取り組みたい。

（ ）現在、身につけている力で充分だと思う。

（2）結果

①読譜力調査

前述したように、第1回目のアンケートを行う前に、実際の読譜力を調査するためのト音記号、ヘ音記号それぞれ20問の読譜問題を解答させている。表2に正解数の分布を示す。

表2 読譜力調査

正解数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ト音記号	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	4	2	2	3	1	2	3	11	99
ヘ音記号	13	4	0	0	1	0	1	0	2	2	1	2	4	2	1	4	6	6	2	10	70

（数字は正解数毎の人数）

全20問を正解できた学生はト音記号が99名（75.6%）、ヘ音記号が70名（53.4%）であった。そのうちの65名（49.6%）がト音記号、ヘ音記号共に全問正解している。平成22年度実施の読譜力調査の結果と比較してみると、ト音記号を76.3%、ヘ音記号を53.5%、ト音記号、ヘ音記号の両方を50.0%の学生が全問正解しており、こうした割合は今年度とほとんど同じであると言える。しかし、平成22年度はト音記号、ヘ音記号共に正解数が0問の学生はいなかったが、今年度はト音記号、ヘ音記号共に1問も読めていない学生がいることが分かった。特にヘ音記号の問題は13名（9.9%）の学生が1問も読めておらず、平成22年度に比べて読譜を苦手としている学生が多いと考えられる。

②アンケート

アンケートの読譜に関する設問の回答結果を示していく。平成22年度と同様にト音記号、ヘ音記号それぞれを3つのブロックに分けた譜表を載せ、「見てすぐ読める」、「考えれば読める

表3-1 アンケート結果（ト音記号）

	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
①	39名(29.8%) / 61.4%	86名(65.6%) / 37.7%	6名(4.6%) / 0.9%
②	105名(80.2%) / 78.1%	24名(18.3%) / 21.0%	2名(1.5%) / 0.9%
③	49名(37.4%) / 43.0%	76名(58.0%) / 55.2%	6名(4.6%) / 1.8%

平成23年度の回答数（全体における割合） / 平成22年度の回答結果から得られた割合

る]、「読めない」で回答させた(表1)。その結果をト音記号の3つのブロックについては表3-1に、ヘ音記号の3つのブロックについては表3-2にまとめた。また、参考として平成22年度の回答結果から得られた割合も併記しておく。

ト音記号の五線内の音域である②のブロックは、約8割の学生が「見てすぐ読める」と回答している。加線を使って表した音域では、①のブロックよりも③のブロックを「見てすぐ読める」と回答した学生が若干多い結果となった。平成22年度の回答結果では、①のブロックを「見てすぐ読める」と回答した学生が③のブロックに比べて多かったため、ト音記号の読譜力は五線内の音域、五線より下の加線を使って表した音域、五線より上の加線を使って表した音域の順に低下すると認識していたが、今回、異なる結果が得られた。要因の1つとして、アンケートを行う前に読譜問題を解答させていることも考えられるが、この問題についてはさらに調査を続ける必要がある。

表3-2 アンケート調査(ヘ音記号)

	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
④	16名(12.2%) / 29.0%	103名(78.6%) / 64.0%	12名(9.2%) / 7.0%
⑤	71名(54.2%) / 48.2%	51名(38.9%) / 46.5%	9名(6.9%) / 5.3%
⑥	40名(30.5%) / 37.7%	79名(60.3%) / 55.3%	12名(9.2%) / 7.0%

平成23年度の回答数(全体における割合) / 平成22年度の回答結果から得られた割合

ヘ音記号もト音記号と同様に、五線内の音域である⑤のブロックを「見てすぐ読める」と回答した学生が最も多かった。加線を使って表した音域では、④のブロックは約1割にとどまったのに対して、⑥のブロックは約3割の学生が「見てすぐ読める」と回答している。ヘ音記号の読譜力は平成22年度に得られた結果と同じく、五線内の音域、五線より上の加線を使って表した音域、五線より下の加線を使って表した音域の順に低下するようである。しかし、ト音記号と共に、引き続き調査結果を重ねた後に判断するものとする。

今年度と平成22年度の結果を比較してみると、ト音記号、ヘ音記号共に、五線内の音域では「考えれば読める」の割合が減少し、「見てすぐ読める」の割合が増加している。一方、五線外の加線を使って表した音域では「考えれば読める」の割合が増加し、「見てすぐ読める」の割合が減少する結果となった。

すでに周知の事実ではあるが、ト音記号に比べてヘ音記号の読譜を苦手としている学生は多い。五線内の音域は見て即座に読めるわけではないにしても、ほとんどの学生が読むことができるようであるが、加線を使って表した音域になると「読めない」と回答している学生も少なくない。また、五線より上か下かにかかわらず、加線を使って表した音域については「考えれば読める」と回答している学生が圧倒的に多い。「考えれば読める」ということは読譜に時間がかかるということを示唆しており、ヘ音記号の読譜に対する苦手意識を窺い知ることができるのではないだろうか。今年度の回答結果と平成22年度の回答結果を比較してみると、ト音記号、ヘ音記号の全てのブロックにおいて「読めない」と回答した学生が増加している。読譜力調査の結果からも、平成22年度に比べて読譜を苦手としている学生が多いと考えられることは述べたが、アンケート調査からも同様の結果が得られたと言える。

次に、今年度追加した設問の結果について述べていく。まず、「読譜力(音符を読む力)について教えてください」として、学生が自身の読譜力をどのように認識しているかを調査した。

これはブロック分けした調査とは別に、読譜そのものについて学生がどのように意識しているかを明らかにするためのものである。結果は「すでに充分、音符を読むことができる」が15名（11.4%）、「ある程度は音符を読むことができる」が104名（79.4%）、「ほとんど音符を読むことができない」が12名（9.2%）であった。

また、「今後、読譜力を身につけていきたいと思っていますか」として、読譜力習得に対する意欲について調査した結果、「身につけるように取り組みたい」が127名（96.9%）、「現在身につけている力で充分だと思う」が4名（3.1%）であり、学生の多くが読譜力を身につけていこうという意欲的な姿勢であることが明らかとなった。「現在身につけている力で充分だと思う」と回答した4名は、自身の読譜力について「すでに充分、音符を読むことができる」と回答しており、読譜に対する自信が窺える。読譜力調査の結果をしてみると、4名中3名がト音記号、ヘ音記号共に20問全問正解できており、1名はヘ音記号の問題で1問の読み間違いがあった。

3、指導

「第57号」でも述べたとおり、本学科では平成20年度から授業の中で期間・方法を統一した読譜指導を行っている。大枠は平成22年度の指導内容に則り、今年度も音楽担当教員全員（ピアノ個人レッスン担当9名）で以下の2つの読譜指導に取り組んだ。

- ① 読譜力育成の妨げとなることが懸念されるため、5月の連休以降は楽譜への階名の書き込みを行わないということを徹底する。
- ② 特に音符が読めない学生には音符カードを用いた課題を出し、授業時間以外でも復習しながら練習するように促す。

読譜力は地道な取り組みを繰り返し行うことによって身につくものであるため、全15回の「保育表現技術（音楽1）」の授業でピアノ個人レッスンを受け、音楽理論を学んでいくことによって、ある程度の読譜力は育成されると考えている。

上記の方法と並行して、個別指導の対象となる学生を絞ったマンツーマンの読譜指導を今年度も行った。アンケート調査の結果（表3）や読譜力調査の結果（表2）からも明らかであるように、音符を読めないと意識している学生、または音符を読むことが苦手な学生は昨年度より増加している。こうした学生が早い段階で、音符を早く正確に読み取る力を身につけられるように、平成22年度の取り組みの内容や成果を参考として以下の要領で指導を行った³⁾。

時期 平成23年5月10日（火）～平成23年7月26日（火）

「保育表現技術（音楽1）」の全15回の授業のうち、12回の授業時間内。

目的 音符を読めないと意識している学生、または音符を読むことが苦手な学生に早く正確に音符を読む力を身につけさせる。

対象 平成23年度保育学科1年生131名のアンケート調査の回答結果と読譜力調査の解答結果を照らし合わせ、音符を読めないと意識している学生、または音符を読むことが苦手な学生14名を選出した。

方法 「保育表現技術（音楽1）」の授業におけるピアノ個人レッスンの待ち時間を利用して、毎回20問ずつの読譜問題を解答させる。取り組んだ読譜問題の内容は以下のとおりであ

る。加線を使って表した音域は上下共に第3線の線の音符までとした。

- 1、ト音記号
- 2、ト音記号の確認
- 3、ヘ音記号 (五線内の音域の11音)
- 4、ヘ音記号 (五線内の音域の11音) の確認
- 5、ヘ音記号 (五線内の音域に上の加線を使った音域を加えた16音)
- 6、ヘ音記号 (五線内の音域に上の加線を使った音域を加えた16音) の確認、ト音記号の確認
- 7、ヘ音記号 (五線内の音域に下の加線を使った音域を加えた16音)
- 8、ヘ音記号 (五線内の音域に下の加線を使った音域を加えた16音) の確認
- 9、ヘ音記号 (上の加線を使った音域の5音、下の加線を使った音域の5音)
- 10、ト音記号10問、ヘ音記号10問
- 11、ト音記号10問、ヘ音記号10問 (ランダムに混合)
- 12、読譜力調査2

平成22年度に実施したマンツーマンの読譜指導は、対象となった学生の満足度も高く、一定の成果をあげることができたと考えている。しかし、アンケートの回答結果を基に指導の対象となる学生を選出したため、アンケートで「読めない」と回答していないが、実際にはほとんど読譜できない状態の学生が指導の対象から外れてしまう結果となってしまった。今年度は読譜に苦手意識を持つ学生と実際に読譜のできない学生の双方を対象とするために、アンケートの回答結果だけでなく、読譜力調査の結果から得られる実際の読譜力を照らし合わせて対象となる学生を選出し、読譜指導に取り組んだ。

平成22年度はト音記号とヘ音記号とは同じ方法で指導を行っており、まず五線内の音域から始めて五線外の加線を使って表した音域へと進み、最終的には全ての音域がランダムに混合した問題や、実際の楽譜のように旋律的に書き表されている問題へと発展させていった。この指導方法を踏まえうえて、さらに効果的な指導を行うことができるように、昨年度の取り組みの成果と今年度実施したアンケート調査の結果を基に指導方法を検討し、改善した。アンケート調査の結果(表3)からも分かるように、ト音記号の音符に比べてヘ音記号の音符を「読めない」と意識している学生は多い。実際の読譜力もト音記号よりヘ音記号の方が劣る傾向にあることから、今年度の指導はヘ音記号の読譜に重点をおいた構成とし、主としてヘ音記号を音域別に学習していくことによってヘ音記号の読譜力の向上を目指した。

取り組みは、理論的な観点からの学習と実際に音符を順に読んでいく学習を交互に行うことを軸として進めることとし、まず、比較的習得しやすい五線内の音域を核の部分として常に取り入れて、上の加線を使って表した音域と下の加線を使って表した音域を順に加えていった。また、対象となった学生が明確な目的意識を持って取り組めるように、課題となる音域を2週連続して扱うことにした。1週目は課題の音域について譜表を使って学習し、読譜問題を解答させて間違いを直した後、覚えておくとい音や読譜する方法等についてアドバイスを与えた。2週目は指導を行う前にまず読譜問題を解答させ、採点後は質問を受けたり、理解できているか確認を行った。読譜問題は1週目と2週目で並びだけ異なるものを作成し、正解数や解答時間の変化から学生の状態を把握できるようにしている。予習や復習については言及しなかったが、学生の学習意欲を喚起するために、次の課題となる音域を必ず予告するようにした。

取り組みの初回にト音記号、ヘ音記号それぞれ上下共に第3線の線の音符までの譜表を示し、見てすぐ読める音を聞き取り調査したところ、ト音記号の「一点ハ音」は対象者14名中11名が

見てすぐ読めると回答した。しかし、へ音記号には1つも読める音がないという対象者が多かったため、へ音記号の音部記号の意味から説明し、「へ音」と「一点へ音」を目印として覚えるようにアドバイスをした。そして、ト音記号、へ音記号共に線の音符と間の音符が順に並んでいることを譜表で確認し、数えていけばどの音符でも読めるようになることを認識させた。

また、取り組みの最終回には入学直後の読譜力調査で行ったト音記号、へ音記号それぞれ20問の読譜問題を1分間の制限時間の中で再度解答させている。対象者14名をA～Mとして表し、マンツーマンの指導を受ける前と受けた後の読譜問題の正解数の変化を表4にまとめた。ただし、対象者Hは欠席が重なり調査不能となったために対象から除外したので、指導後の結果を測定できていない（表4-1、表4-2の※印）。これ以降、14名中13名の結果を示していくものとする。

表4-1 対象者14名の読譜力調査の結果（ト音記号）

対象者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
指導前	12	20	19	12	14	9	14	0	3	20	16	20	12	19
指導後	19	19	20	12	20	20	15	※	18	20	19	20	14	20

表4-2 対象者14名の読譜力調査の結果（へ音記号）

対象者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
指導前	1	1	0	0	0	0	8	0	0	9	12	1	0	9
指導後	20	17	20	20	19	19	20	※	14	20	20	18	13	19

指導前と指導後の読譜力調査の結果を比較してみると、ト音記号、へ音記号共にほとんどの対象者が正解数を増やすことができています。特にへ音記号の音符は指導後、格段に読めるようになっていっています。へ音記号の読譜を重点的に取り上げた指導を行う中で、対象となった学生からは「ト音記号が不安だ」、「ト音記号を忘れないようにしておきたい」という意見が出され、急遽、第6回目にト音記号の確認を行っている。それでもト音記号の読譜がおざなりになってしまっていないか懸念されたが、へ音記号の読譜を学習することによって音符の並びや数え方を理解することができ、その結果、ト音記号の読譜力も育成されたと言える。特に対象者Iはへ音記号の読譜方法が全くわからないという状態から取り組みを開始しているし、対象者Mは線の音符と間の音符が交互に並んでいることをなかなか理解できず、音符を正しく数えられるようになるまでかなりの時間がかかった。しかし、マンツーマンで指導できることの利点を活かして、対象者それぞれが躓いている部分を解消できるように共に取り組み、読譜問題を解答している様子から気付いたことについてアドバイスを与え、理解できているか確認しながら次の課題へ進んでいくというプロセスで取り組んでいくことができた。

全12回の取り組み終了後、表1で示したト音記号、へ音記号それぞれ3つずつのブロックの読譜について再度回答させている。対象となった学生13名の指導前と指導後の回答結果を表5にまとめた。

対象となった学生たちは、全12回の取り組みを終了した後でも自身の読譜力について完全に自信を持てるわけではないようである。指導を行うことによって「読めない」の回答は減らせ

表5 指導前と指導後の比較

	指導前			指導後		
	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない	見てすぐ読める	考えれば読める	読めない
①	2名	8名	3名	0名	13名	0名
②	7名	5名	1名	10名	3名	0名
③	2名	8名	3名	1名	11名	1名
④	1名	9名	3名	0名	13名	0名
⑤	1名	9名	3名	2名	11名	0名
⑥	1名	8名	4名	1名	12名	0名

たものの、「見てすぐ読める」の回答があまり増えていない。また、対象者FとHが指導前には「見てすぐ読める」と回答していた①、③、④のブロックにおいて、指導後は「考えれば読める」という回答に変更している点は非常に興味深い。ヘ音記号の読譜について重点的に指導を行ったにもかかわらず、ヘ音記号だけでなくト音記号の読譜に対する意識にも変化が生じている。

また同時に、マンツーマンの読譜指導に関するアンケートも実施した。アンケートの内容と回答を表6に示す。

表6 マンツーマンの読譜指導に関するアンケートと回答結果

①	読譜力（音符を読む力）について教えてください。 すでに充分、音符を読むことができる（0名） ある程度は音符を読むことができる（13名） ほとんど音符を読むことができない（0名）
②	この取り組みは読譜力を身につけるために役に立ちましたか。 役に立った（13名） 少し役に立った（0名） あまり役に立たなかった（0名） 全く役に立たなかった（0名）
③	この取り組みによって、読譜に対する意識は変わりましたか。 強く意識するようになった（8名） 少し意識するようになった（5名） 変わらなかった（0名）
④	読譜について、この取り組みのほかに自分で何か努力しましたか。 はい（5名） いいえ（8名）
⑤	今後、読譜力を身につけるために、自分で努力を続けていく意欲を持っていますか。 はい（13名） いいえ（0名）
⑥	この取り組みのほかに、読譜に関して行ってほしかったことがあれば書いてください。 記入（2名） 無記入（11名）

④および⑥の設問は記述回答としたため、以下に記しておく。

- ④ ・家でプリントの復習をした
 - ・ピアノを弾いて覚えるようにした
 - ・復習としてプリントを見た
 - ・バイエルを読む
 - ・習っている楽譜をできるだけ読むようにしている

- ⑥ ・早く読めるようになって良かった
 - ・移調

⑥の回答に「移調」が挙げられているが、このアンケートを実施した時期に音楽理論の授業では移調を扱っていた。読譜を苦手としている学生の多くはピアノ演奏技術や音楽理論に対しても同様に苦手意識を抱いている場合が多い。そのため、音楽理論の個別指導も受けたいという希望から出た回答ではないかと考えられる。

4、考察

今年度、「読譜2」として実施した読譜に関する取り組みは、平成22年度実施の「読譜1」の指導内容を参考として行ったため、その指導方法や成果を基として指導計画を立てたうえで行うことができた。

まず音楽関連のアンケート調査は、読譜に対する意識についてより正確な回答を得られるようにするために、読譜問題を解答させた後に実施した。アンケートの内容も読譜についての設問を増やしてさらに詳しく調査を行っている。その結果、平成22年度と比較するとト音記号、ヘ音記号共に、五線内の音域では「考えれば読める」と回答した学生の割合が減少し、「見えずぐ読める」と「読めない」の割合が増加した。これは、読譜問題を解くことによって、自身の読譜力についてある程度認識したうえでアンケートに回答することができ、曖昧な回答を選択する学生が減ったためではないかと推察できる。そして、ヘ音記号の読譜を苦手としている学生が非常に多く、実際の読譜力もト音記号に比べてヘ音記号の方が劣るという問題が明らかとなった。こうした結果も踏まえて「読譜2」の指導に取り組んだ。

「読譜2」では平成22年度と同様に、ピアノ個人レッスンと音楽理論の授業で行う指導と並行して、対象となる学生を絞って行うマンツーマンの指導を実施した。ヘ音記号に対する苦手意識や読譜力の低い傾向は、平成22年度の取り組みの中でも如実に表れており、ト音記号の読譜は比較的短期間で習得できるのに対して、ヘ音記号の読譜は読み間違えが目立つ、読譜に時間がかかる、ト音記号と混同してしまう等、対象となった学生たちは苦戦している様子であった。後期開講の「保育表現技術（音楽2）」の授業では、こどもの歌の弾き歌いやコード伴奏に取り組むため、ト音記号、ヘ音記号共にある程度の読譜力が身につけている必要があり、ヘ音記号の読譜力が著しく低い状態であることは学生にとって躓きの原因となる。そのため、早い段階でヘ音記号もト音記号と同等の読譜力を習得させておく必要があるのではないかと考え、今年度はト音記号から順に学習していくのではなく、ヘ音記号の読譜に重点を置いた指導内容とした。急ぎ足の感は否めないが、それでもヘ音記号だけでなく、ト音記号の読譜力も向上しているという結果が得られたことは大きな成果であったと言える。

また対象となった学生たちは、それぞれの能力や進度に合わせたマンツーマンの指導を受けた後、ようやく自身の読譜力についての確に認識できるようになったのではないかと考えられる。その一つの表れとして、アンケートの回答結果(表5)からも明らかであるように、指導後、「見てすぐ読める」と回答する学生が期待していたほどには増加しなかった。加線を使って表した音域では、減少しているブロックもある。指導中は対象となる学生それぞれに、苦手な部分や不安なことを尋ねるようにしていたが、「へ音記号が苦手」、「加線が増えると読みにくい」、「加線の部分は数えないと読めない」といった声が多く聞かれた。対象となった学生たちは、読譜について取り組んでいく中で問題点を含めた自身の実力を把握することができ、同時に読譜に対する意識も高めていったのではないだろうか。

読譜を苦手とする学生の多くは、読譜練習のテキストにピアノ個人レッスンの課題の1つとして出されているバイエル教則本を用いている。しかし、曲を習得するための1つの過程として行っているに過ぎず、幾度も楽譜を見て繰り返し音符を読むというわけではないようである。そのため、「暗譜」ではなく、俗に言う「丸暗記」をしてしまっている。その後は読譜のために改めて楽譜を見るより、「丸暗記」した状態でできるだけ間違えないように演奏するという方向に集中し、あまり楽譜を見ないで演奏してしまっているのではないと思われる。バイエル教則本は、読譜を苦手とする学生にとっては演奏することも非常に高度で難しいテキストである。ましてや読譜の訓練に用いるのであれば、読譜練習のためにも効果的な活用方法を指導していかなくてはならない。

5、結語

緒言でも述べたように、本学科では、楽譜に対する学生の意識を高めて読譜力を育成していくことを指導目標の1つに掲げ、これまで一貫して取り組んできた。平成22年度に初めての試みとして取り組んだマンツーマンの読譜指導は、その指導内容や成果を拠り所として今年度も実施した。

まず、音符を読めないと意識している学生と音符を読むことが苦手な学生のどちらも指導の対象から外れてしまうことがないように、対象となる学生の選出方法を改善した。今回は個別指導が必要だと考えられる学生ばかりを対象とすることができたので、来年度以降も同じ方法で対象となる学生を絞っていくこととしたい。

指導内容は、短い期間の中で効率的に学習できるようにするために、へ音記号に重点を置いた構成とした結果、全12回の取り組み終了後にはへ音記号だけでなくト音記号の読譜力にも向上が見られた。集中的にへ音記号の読譜を学ぶことによって、へ音記号の音符を読む力を習得できるだけでなく、身につけた読譜方法をト音記号の音符の場合にも応用させることができたためではないかと考えられる。しかし、取り組みが終了した後でも対象となった学生たちは自身の読譜力を、特に加線を使って表した音域について、ト音記号、へ音記号共に「見てすぐ読める」と回答できるまでには至っていないと考えているようである。常に正確に読めるという段階までは達していないものの、対象となった学生たちの読譜力と読譜に対する意識にはかなりの向上が見られたので、この指導内容を活かし、さらに効率的で効果的な指導方法を思案しながら今後の指導を行うようにする。

平成20年度から行っている期間・方法を統一した読譜指導は、これまで授業の終了と共に一

応の区切りとしてきたが、今年度は後期開講の「保育表現技術（音楽2）」の授業の中でも引き続き取り組み、学生の読譜に対する意識をさらに高めていきたい。授業ではこどもの歌を教材として弾き歌いを学習していくが、右手の歌唱旋律でト音記号の読譜力を、左手のコード伴奏等でヘ音記号の読譜力を向上させていくような指導を計画している。マンツーマンでの指導は行わないが、授業の中で読譜に対する意識を持ち続けられるように導き、学生一人ひとりの努力に期待したい。

来年度以降も読譜指導は継続して取り組む予定であるが、加線を使って表した音域に対する抵抗を軽減し、かつ効果的な指導方法を模索していく必要がある。また、加線を使って表した音域について、五線より上か下かで学生の意識はどのように変わるのか平成22年度実施の「読譜1」でも問題として取り上げたが、この問題はさらに複数年度分の調査結果を得た後に総合的に判断できるのではないかと考えている。

本学科の学生たちは保育者という明確な目標を持って学習しているが、保育現場で求められる音楽的な実践力や応用力を身につけるために必要なことの1つとして読譜力が挙げられる。まず、敏速且つ正確に楽譜を読み取ることから始まり、次に曲全体の理解へと進み、それが将来的には豊かな表現力へと繋がっていくものである。そして、保育者の豊かな感性は子どもたちへと伝わっていく。従って、読譜力を身につけることは必要不可欠な問題であると言っても過言ではない。本研究で得た結果を参考として、今後の読譜指導を含む音楽全般の指導内容を検討したいと考えている。

注

- 1) 短期大学部保育学科2年生を対象とした選択科目である。平成23年度のみ、旧カリキュラムの科目名「基礎技能（音楽3）」として開講した。
- 2) 平成22年度実施のアンケート調査の詳細は「第57号」を参照していただきたい。
- 3) 平成22年度実施の指導内容の詳細は「第57号」を参照していただきたい。

